

Title	ニーバー思惟の特質：バルトとの対比において（共同研究報告：ニーバー研究）
Author(s)	鈴木, 幸
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-5 : 12
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2372
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

Seigakuin Repository for academic archive

【ニーバー研究】
ニーバー 思惟の特質
—バルトとの対比において—

2010年1月30日(土)、聖学院本部新館2階において、2009年度第3回ニーバー研究会が開催され、聖学院大学総合研究所所長の大木英夫氏が発表された。49名の参加者があり、標記のテーマの下、ニーバー著『アメリカ史のアイロニー』(The Irony of American History, 1952)に対する考察が行われた。以下に概要を記す。

『アメリカ史のアイロニー』では、「アメリカ史」を歴史研究としてではなく、神学的研究の対象として捉えている。ドイツ語で「歴史」は、「ヒストリエ」と「ゲシヒテ」と「ゲシェーエン」の3語で使い分けられるが、バルトの神学が出来事そのものについて表わす「ゲシェーエン」ならば、ニーバーの言う「アメリカ史」は「伝統」としても捉える事のできる「ゲシヒテ」であり、人間の内面性と関係する。ニーバーによれば、歴史と人間、つまり歴史論と人間論は連結しているのである。また、「アイロニー」は、その歴史に関与する人間に付随する問題として捉えられている。

本書は、冷戦の激化の中、ソ連のコミュニズムに対抗・克服するため、アメリカにおける民主シーの原点に立ち戻ること、つまり「民主シーの強力な力」を蘇らせることを方針としている(第1章)。そもそもアメリカは、第二次大戦後に「世界共同体の中心」として担がれ、その膨大な責任を負わされたため、民主シーの本質を取り戻す必要があった(第2章)。ジェファソン主義の下、成功と幸福が徳の基盤とされるが(第3章)、神の恵みによって国家が徳を得たこと、そして、努力する行為・献身が認められることが強調される(第4章)。また、カルヴィニズムとジェファソン主義の同一化から生じる自由論を指摘し、権力の専制を恐れつつも、その必要性を理解した上で、民主シーの持つ「生命力の勝利」が説かれた(第5章)。国際的な階級闘争においては、ヒトラーとスターリンを比較し、長い歴史の中で忍耐が培われることが示唆される(第6章)。アメリカの将来

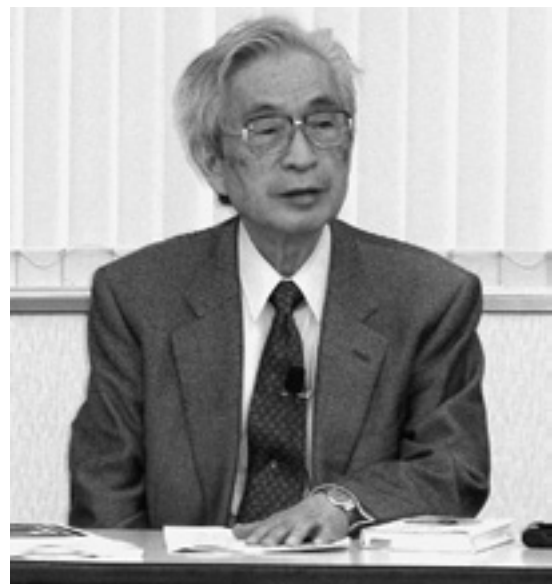
については、「アメリカ」を「アメリカ史の神学」として捉えることで、世界共同体における立場を確認し(第7章)、そして、歴史上の「悪」は思いあがりであり、そこに「アイロニーの源泉」があること、アイロニーは無意識的な弱さにあることが説明された(第8章)。

本書は、アメリカ史及び世界史を「神学する」ニーバーが見られることから、「新しい神学の試み」と呼ぶことができる。そして、「世界」を共同体・グローバリゼーションとして捉えていることから、新しい視点・課題を取り組んだ最初の神学者として、ニーバーを称えることができる。また、ドン・キホーテを例に、新しい時代には新しい人間理解・新しい政治・新しい世界の形成が必要であることが説かれた。

発表後の質疑応答では、神学と社会学との関係、正しさの中にある悪、人は愛と寛大さを持って生まれること、アメリカとヨーロッパとの相違、宗教家として神の言葉を語る重要性、ドグマ、ニーバー自身のアイロニーについて、人間の内面性、日本への影響、敗戦の経験が与える「目覚め」と「生き返る」ことの可能性等、多岐にわたる活発な議論が交わされた。

(文責：鈴木幸 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)

(2010年1月30日、聖学院本部新館2階)



大木英夫 聖学院大学総合研究所所長